

第 40 回日本義肢装具士学会学術大会に参加して

星野 晶

神奈川リハビリテーション病院 リハビリテーション工学科 義肢装具士

1. はじめに

2024 年 11 月 9（土）・10 日（日）に第 40 回日本義肢装具士学会学術大会が福岡県福岡市の電気ビル共創館・本館にて開催された。

2. 大会の概要

本大会のテーマは「社会を支える義肢・装具、支援機器」とされ、技術の発展だけを求めるのではなく、それらがどのように社会で役割を果たすのかに焦点を当てた内容だった。テーマに沿った特別プログラムとして、「ユニバーサルデザインの社会をどう創るか」など、ユーザーや社会を軸にした演題が設けられた。また、各種装具の歴史的変遷についての演題などもあり、幅広い内容が取り上げられた。さらに、今回から新たに YIA（Young Investigator Awards）セッションが設けられ、教育に関する演題も多く発表されていた。

3. 会場の雰囲気

40 回目という節目の開催である本大会は、新型コロナ以降初めて、オンデマンド配信を行わない完全な対面式で実施された。発表会場は満席になり、入りきれない人が外にあふれるほどの盛況ぶりだった。これは新型コロナ中も学術交流のつながりが途絶えることなく続いてきたことを象徴しているように感じられた。

4. 所感

本大会はそのテーマの通り、義肢・装具、支援

機器、さらにはそれに携わる専門職が、社会の中でどのように役割を果たしていくかということを考えさせられる内容だった。

例えば、シンポジウム 1「高機能電子制御膝継手の今」では、高額な高機能電子制御膝継手が海外で保険適用され普及が進んでいる現状について、国内の主要 4 メーカーが説明を行った。その普及の背景として、同膝継手が転倒のリスクを減少させ、結果的に医療費削減に繋がるという医療経済的な観点や、海外と日本の人権意識の違いなどが挙げられた。

近年、医療分野においては、ADL 改善率などを指標とした EBM（Evidence-Based Medicine）が重視されている。しかし、本大会を通じて、一人ひとりのユーザーが自分らしく活躍できる社会を実現するためには、EBM だけでなく対象者の QOL を基軸とした価値に基づく医療である、VBM（value-based medicine）の考え方も必要だと感じた。一方で、医療における資源には限りがあることも事実である。技術の発展により義肢・装具・支援機器の機能は向上しているが、ユーザーに真の価値を提供できないのであれば、単なる過剰な機能でしかない。限られた資源を公平に分配するために、価値を見極めることが重要である。専門職には、その機器の使用がどんな価値をもたらすのかについて、的確に説明する能力と責任が求められるだろう。そのために、関連職種のさらなる連携やデータの蓄積、それを支える人材の育成が不可欠であると考えられる。義肢・装具・支援機器により支えられたユーザーが、今度は社会を支える活躍ができるよう、私も役割を果たし、ユーザーや社会に貢献できるように努めていきたい。

神奈川リハビリテーション病院 リハビリテーション工学科
E-mail: re-po@kanagawa-rehab.or.jp